

中曾根北遺跡 A 調査区

~~緊急発掘調査報告書~~

1980

箕輪町教育委員会

中曾根北遺跡

A 地区

1980

箕輪町教育委員会

序 文

県営畠地帯総合土地改良事業が昭和54年度事業として当町中曾根地区に実施されることとなつたが、実施地区内には遺跡包蔵地が含まれることから、南信土地改良事務所の深いご理解の下に緊急発掘が行われることになったのである。

当町は、先史原史時代の遺跡に富み、百七十ヶ所にものぼる遺跡包蔵地が確認されているが、そのうち経ヶ岳山麓に沿って点在する包蔵地はその四分の一にものぼり、主として縄文時代のそれが大部分であり、中には早期の遺跡も含まれている。さらに、古墳時代末期の小円墳もあることから、延喜の占道の東山道の通過地点でもあり、まだ比定されない深沢の駅址と関連させて考えるとき、この中曾根北遺跡の発掘には興味深々たるものがあったわけである。

しかし、発掘の結果は二つの住居址、それも平安期と推定されるものの発掘に終ったが、曾根と稱される地名が石まじりの瘦地を指すことと、推定される深沢の駅址との関連から、何らかの推理を加えて見るとも、あながち危険無稽ではないようにも思われる。

終りに本調査に当られた林団長と調査員の諸君、さらに協力された地元中曾根区の皆さんに深甚なる敬意を表する次第である。

笑顔町教育長

河 手 貞 則

凡　　例

1. この調査は、箕輪町中曾根地籍の県営畠地帯総合土地改良事業に伴うものであるため、事業着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 遺構の縮尺はそれぞれの図に示してある。
4. 本報告書の執筆者および図版作製者は次のとおりである。
 - 本文執筆者 林 茂樹 柴 登巳夫 福沢幸一
 - 図版製作者 土器・石器の実測、土器拓影。
 - 藤森美枝 竹入洋子 福沢幸一
 - 市川 隆 木下 久 柴 登巳夫
 - 写真撮影 柴 登巳夫
5. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

目 次

序 文

凡 例

目 次

挿図目次

第 I 章 遺跡の立地 1

 第 1 節 位 置 1 ~ 2

 第 2 節 自然環境 2

第 II 章 発掘調査の経過 3 ~ 7

 第 1 節 発掘調査に至るまで 3 ~ 4

 第 2 節 歴史的環境 5 ~ 7

第 III 章 発掘調査の結果 8 ~ 18

 第 1 節 調査結果の概要 8 ~ 9

 第 2 節 遺 構 10 ~ 14

 第 3 節 遺 物 15

第 IV 章 まとめ 16 ~ 17

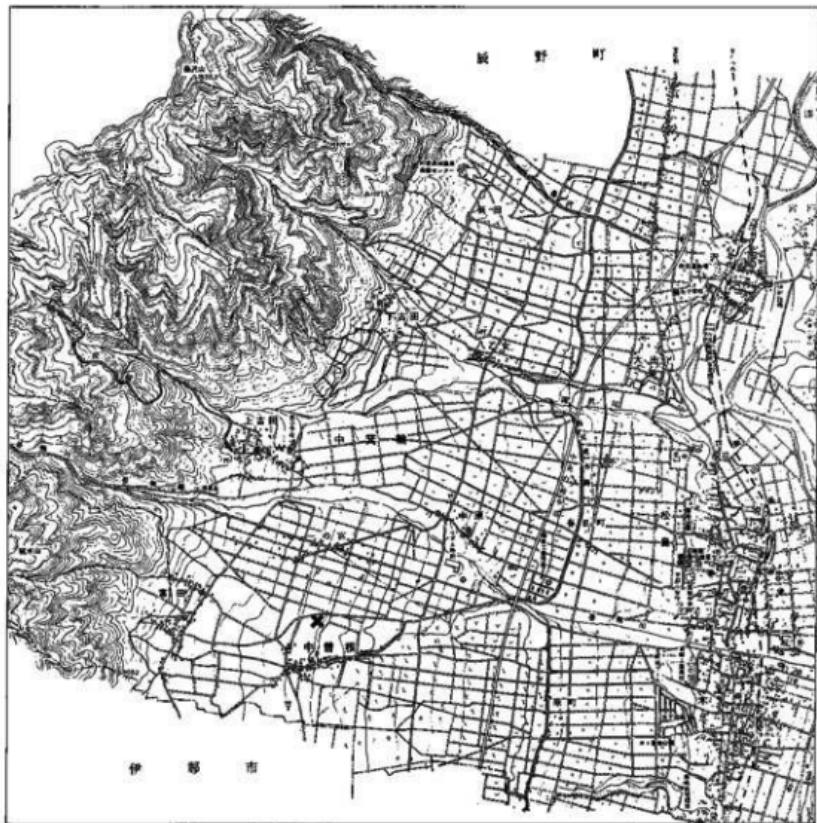
挿図目次

第1図 位置図.....	(1)
第2図 遺跡周辺の地形.....	(2)
第3図 周辺遺跡分布図.....	(6)
第4図 地形図及び発掘区域図.....	(8)
第5図 遺構全測図.....	(9)
第6図 A地区遺構図.....	(10)
第7図 第1号建造物址.....	(11)
第8図 第2号建造物址.....	(12)
第9図 第2号建造物址地層図.....	(13)
第10図 第1号土括実測図.....	(13)
第11図 第1号土括地層図.....	(14)
第12図 第2号土括実測図.....	(14)
第13図 第2号土括地層図.....	(14)
第14図 土器拓影.....	(15)
第15図 石器実測図.....	(15)

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

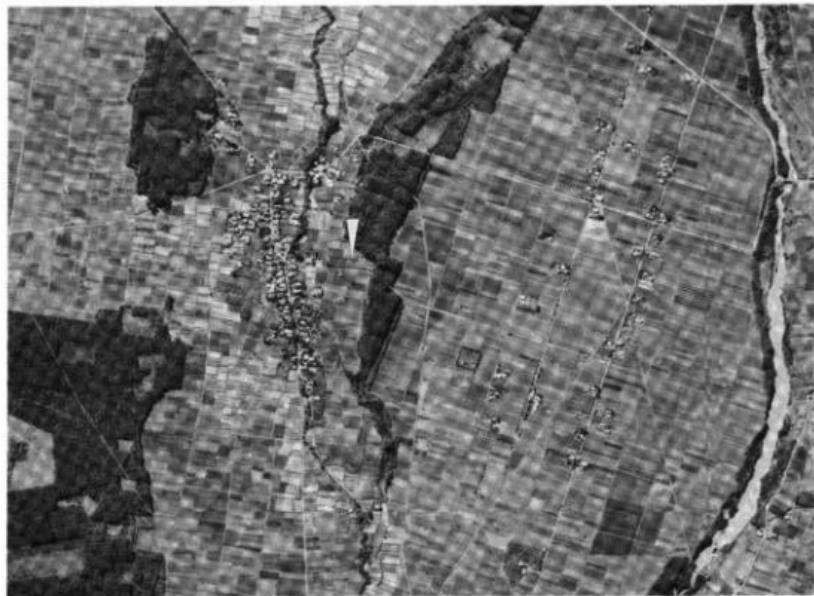
中曾根北遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中曾根14901—2、14901—4番地に所在する。帶無川と大泉川によって形成された扇状地上にあり、国鉄飯田線木下駅より西方へ約3kmの地点にある。遺跡の南には中曾根部落があり、標高は820m前後を示している。遺跡の北側には一の宮部落が広がり、帶無川に沿って大道跡が続いている。



第1図 位 置 図

第2節 自然環境

箕輪町の地形は天竜川によって二分されているため川西を竜西、川東を竜東と呼んでいる。竜西地区は経ヶ岳(2296.3m)を主峰に、黒沢山(2126.8m)、桑沢山(1538.3m)と続く山々を背にして、そこに源を発した大泉川、帶無川、深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。これ等の運搬堆積によってでき上がった扇状地は東方に向って緩かな傾斜をなしている。本遺跡は扇尖部や上方に位置し、大泉川と帶無川のほぼ中央にある。この扇状地の頂部・扇尖部は流水の地下への浸透がはげしく帶無川は中流や上ですべての流水が浸透している。これ等は伏流水となって洪積台地の下を流れ、扇端部の段丘崖下に豊かな湧水となって出ている。年間の水温も一定で15度前後である。今日においても水道水として重要な水源となっている。遺跡南には西方の山より流下する樅の木川が部落の中央を流れている。遺跡から帶無川までは約1km離れており、生活用水として利用するには離れすぎている。その点樅の木川までは約100mなのでこの流水を使用したものと思うが、水量が少なく、はたして当時から現在の位置に流れていたかは疑問である。この中曾根部落は水が少なく、水田の水を確保するために江戸時代末期頃まで、部落内いたるところに横井戸を掘り、現在もその井戸によって田を耕作しているところがある。このように一帯は水便が悪いため、古代よりあまり居住性には富んでいなかったのであろう。



第2図 遺跡周辺の地形

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町中曾根部落の北に広がる畑作地帯である。箕輪町はもとより、天竜川右岸の電西に広く土地改良事業の計画がなされ、この地域も県営畑地帯総合土地改良第五工区に入っている。この事業の実施に伴ない本遺跡が破壊されるおそれがあるため、緊急発掘調査を行ない記録保存を行なうよう県教育委員会から指導があった。県教育委員会、南信土地改良事務所、箕輪町教育委員会協議のうえ、発掘地点・調査時期等決定を行なった。以後発掘調査の計画を進め数回にわたり調査予定地区及び周辺の踏査を行なう。昭和54年9月に入り調査団を組織し、日本考古学協会々員の林茂樹氏を調査団長にお願いし、10月下旬より記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

1. 発掘調査団

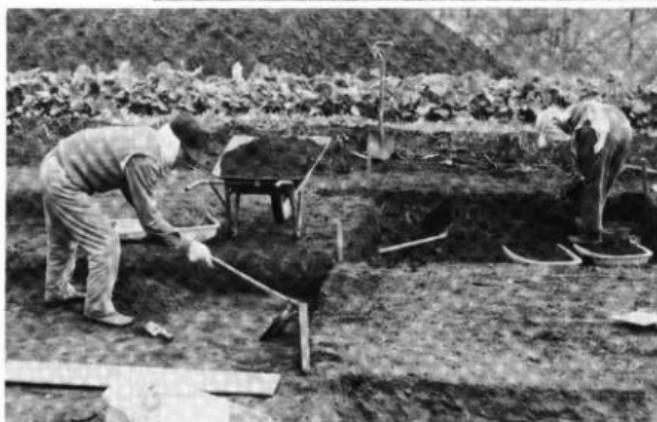
団長	林 茂樹	日本考古学協会々員
調査主任	柴 登巳夫	
調査員	福沢 幸一	
"	森 美枝	
"	木下 久	
参与	馬場 玲一	箕輪町教育委員会教育委員長
	原 茂人	" 委員長職務代理
	桑沢 良平	" 教育委員
戸田	宗十	"
春日	琢爾	箕輪町文化財調査委員会委員長
樋口	彦雄	箕輪町文化財調査委員
星野	和美	"
矢沢	喬治	"
市川	修三	"
小川	守人	"
堀口	貞幸	"
上田	晴生	"
藤田	寛人	"
事務局	河手 貞則	箕輪町教育委員会教育長
丸山	昭夫	" 教育課長
唐澤	千洋	" 社会教育係長

中 村 文 好 箕輪町教育委員会社会教育主事
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員
竹 入 洋 子

〃

2. 発掘調査の経過

調査地区が決定した後、調査員によって現地及び、周辺の表面採集を行なう。その結果灰釉陶器の採集が多かった。そのため調査によって遺構が検出されるならば、平安時代のものであろうと予想した。10月末に調査地区をブルトーザーによる排土を行なう。調査地区を二つに分け北側をA調査区、南側をB調査区とする。A調査区に65グリット、B調査区に40グリット設定する。調査区全体を2m方眼のグリット設定から開始し、A調査区東側より始める。調査は晴天に恵まれ、地元中曾根区の皆さんとの協力により順調に進められた。その結果、以後に記したような調査結果となった。



調査風景

第2節 歴史的環境

箕輪町内は先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、遺跡の総数は170ヶ所を越し、伊那の平においても屈指の遺跡地帯を形成している。町内の遺跡は立地する条件により四類に分けて考えられている。

第一類 経ヶ岳山塊の山麓附近に立地する遺跡群。

第二類 天竜川西岸段丘上に列状に並ぶ遺跡群。

第三類 天竜川東岸の段丘上及び扇状台地に立地する遺跡群。

第四類 低位段丘（沖積段丘）の遺跡。

中曾根北遺跡は第一類に入る。第一類に入る遺跡は富田、中曾根、一の宮、上古田、下古田、長田、八乙女、中原等であるが、中でも富田、上古田、下古田が遺跡の数では多い。一類の中に入る遺跡は41ヶ所に上り、町全体の4分の1を占めており、ほとんどが縄文時代の遺跡である（注1）。本遺跡に最も接近し、第1類遺跡中最大と思われるのが一の宮遺跡で、過去における出土資料も豊富である。又、本遺跡の西方富田部落の樅ノ木山遺跡からは縄文時代早期押型文土器が出土している。現在のところでは第一類遺跡群において唯一の早期遺跡である。又、同部落の大久保遺跡からは黒曜石製の長さ6.5cmのポイントも出土している。大久保遺跡は他にも数多くの出土遺物があり、今後十分注意しなければならない遺跡である。古墳時代になり、一の宮地籍に二基の円墳が造られている。共に古墳時代末期に造られた一連の小円墳である。一基は一の宮部落西方の山中にあり「岩屋古墳」と呼ばれている。中曾根部落の古老の話によると、昔は石室の中に出入りできて遊べたと話された。大正年代に石塔の建立のため台石として石室の一部が搬び出されたと伝えられる。そのため石室は原形を保ってはいないが一部その様子を見ることができる。他の一つは帶無川南の山中にあり「狐塚」と呼ばれている。これも大正年代初期に近郷の若い人々によって掘り返され現在はすり鉢状になっている。ここからは直刀が二振出土したと伝えられる。又、この一帯は「東山道」の通過地点並びに深沢の駅址の推定地の一つにもなっており歴史的に多くの問題を秘めた一帯である。

注1. 総遺跡数41ヶ所中縄文時代の遺跡は34ヶ所、弥生時代の遺物を出土する遺跡3ヶ所、平安時代の遺物を出土する遺跡8ヶ所、古墳5基である。時期が重複する遺跡も含まれれる。

注2. 深沢の駅址について現在いくつかの推定位置が考えられており、それぞれに意味をもった説である。駅の中心を下古田に推定する説が有力とされている。（上伊那誌歴史篇 第二節伊那の三駅 P.331）。（市村成人全集第一巻、延喜式所載の東山道の節 P.497）。しかし駅址となれば40戸以上の集落を形成したといわれている以上、大きな生活圏があつて当然と考える。又、それに伴なう灰軸、須恵器が多量に出土する遺跡があるはずと考えたい。下古田地籍にかかる遺跡が少ないのが気になる。その点長田地籍にはこれ等の出土遺物はきわめて豊富である。一方天竜川沿いの段丘上をほぼ直線に通過し、現在の大出地籍に駅址を推定する説は考えられないものか。



- | | | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|-------|-------|--------|
| ● 中曾根北 | ② 大久保 | ③ 植の木沢 | ④ 岩屋古墳 | ⑤ 並木下 | ⑥ 五斗山 | ⑦ 狐塚古墳 |
| ⑧ 一の宮 | ⑨ 南原 | ⑩ 幸道 | ⑪ 山の田 | ⑫ 西久保 | ⑬ 円仏 | ⑭ 金原 |
| ⑮ 深沢北 | ⑯ 待屋 | ⑰ オサキ | ⑱ 十郎 | ⑲ 電ヶ崎 | ⑳ 五輪 | ㉑ 祝 |
| ㉒ 中道 | ㉓ 堂地 | | | | | |

第3図 周辺遺跡分布図

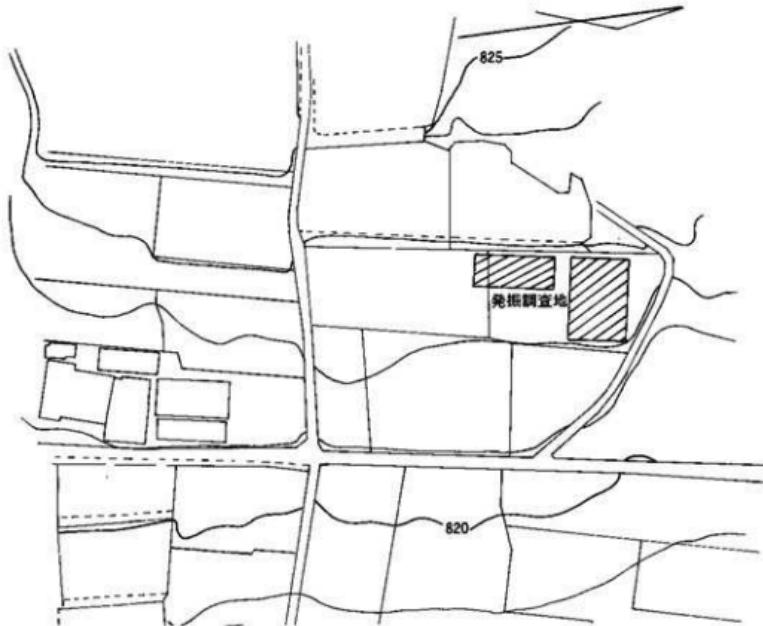


狐塚古墳状況

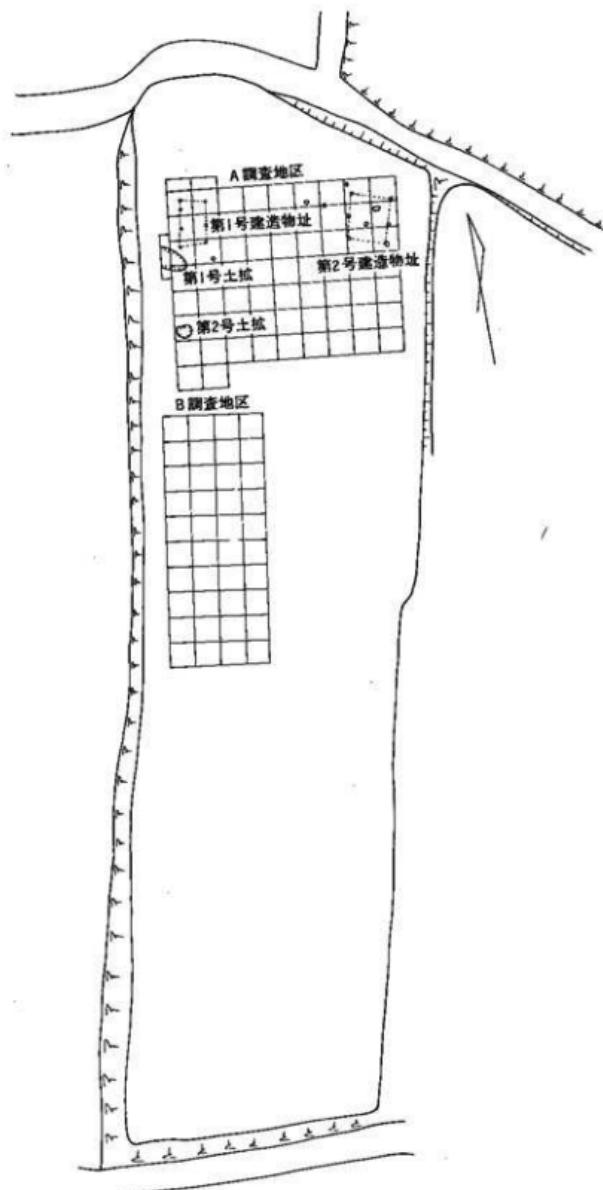
第Ⅲ章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

中曾根地区における土地改良事業に伴い、緊急発掘調査が必要となり、今年春より調査の計画を始めた。10月末に調査予定地区をブルートーザーにより表土を平均30~40cm 排土する。調査地区を二つに分け、北寄りの広い部分をA調査区、南側をB調査区とする。A調査区東北の角よりグリッドごとに発掘を開始したところ、いくつかの柱穴状の落込みが発見された。ここに東西に一本、南北に一本地層を観察する為のベルトを残す。発掘面積が広くなるにつれ、北西の角にも同じような柱穴状の落込みが発見された。北西の角に発見された部分の精査の結果、7柱穴よりなる掘立建造物址であろうと予想し、これを第1号建造物址とする。同じように東北の角に発見された遺構を第2号建造物址とする。これ等の遺構の調査時に遺物の出土がほとんどなく時代の予想が困難であったが、表面採集では、灰釉陶器片をかなり見ることができた。それ等のものから推測し、平安時代の遺構と考える。又、他にも土括が二ヶ所検出されている。B調査地区からは遺構、遺物共にほとんど出土は見られなかった。



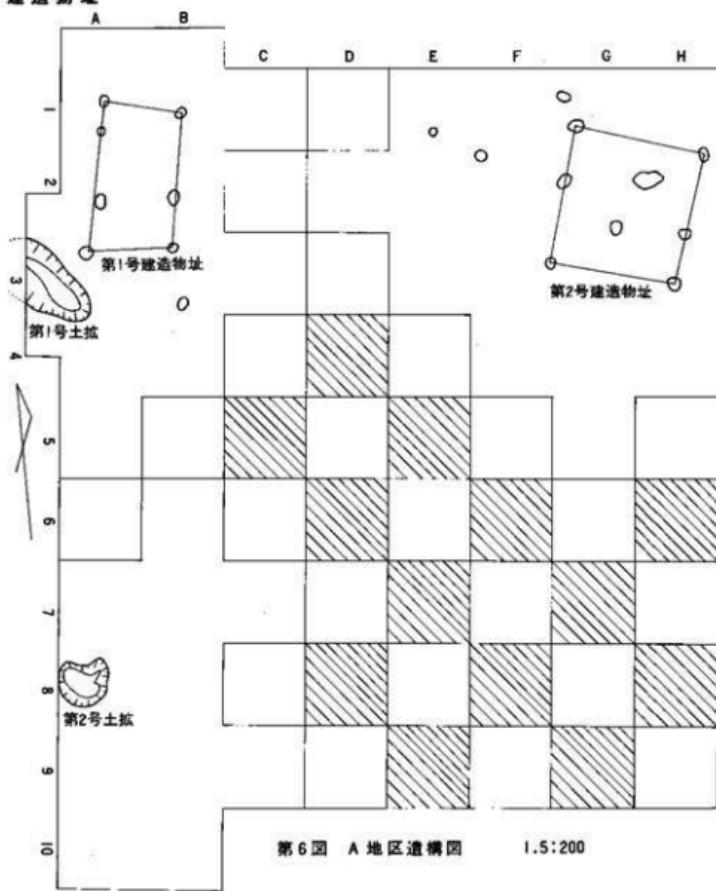
第4図 地形図及び発堀区域図



第5図 造構全測図

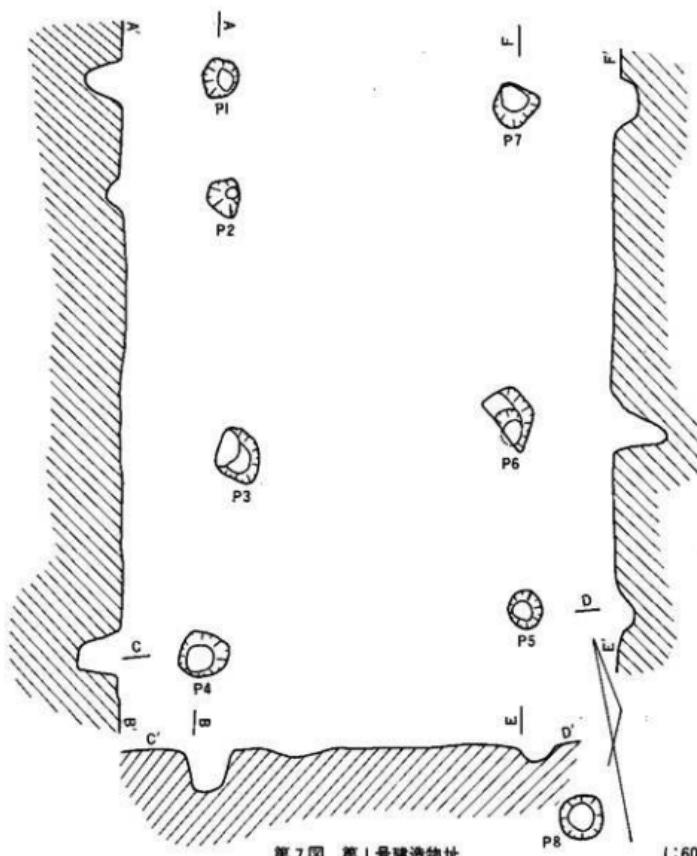
第2節 造 構

1. 建造物址



(1) 第1号建造物址 (第7図)

A調査地区A₁、A₂グリッドに発見された本造構は7柱穴で構成されている。柱穴の大きさ深さは一定せず、直径で22cmから30cm、深さは落込み確認面より12cmから36cmと差がある。柱穴配列は南北に長く、西側に4柱穴、東側に3柱穴がそれぞれほぼ直線に並んでいる。西側の列P₂に対する柱穴が検出されなかったが、これは柱が短かく第四層まで達しなかった為に検出されなかつたのであろう。南北の長辺は3m 70cm東西1m 85cmとなっている。これは尺に直すと12尺と9尺になり2間と1間の大きさになる。又、東側列の南にP₆が検出されている。これは建造物補強用



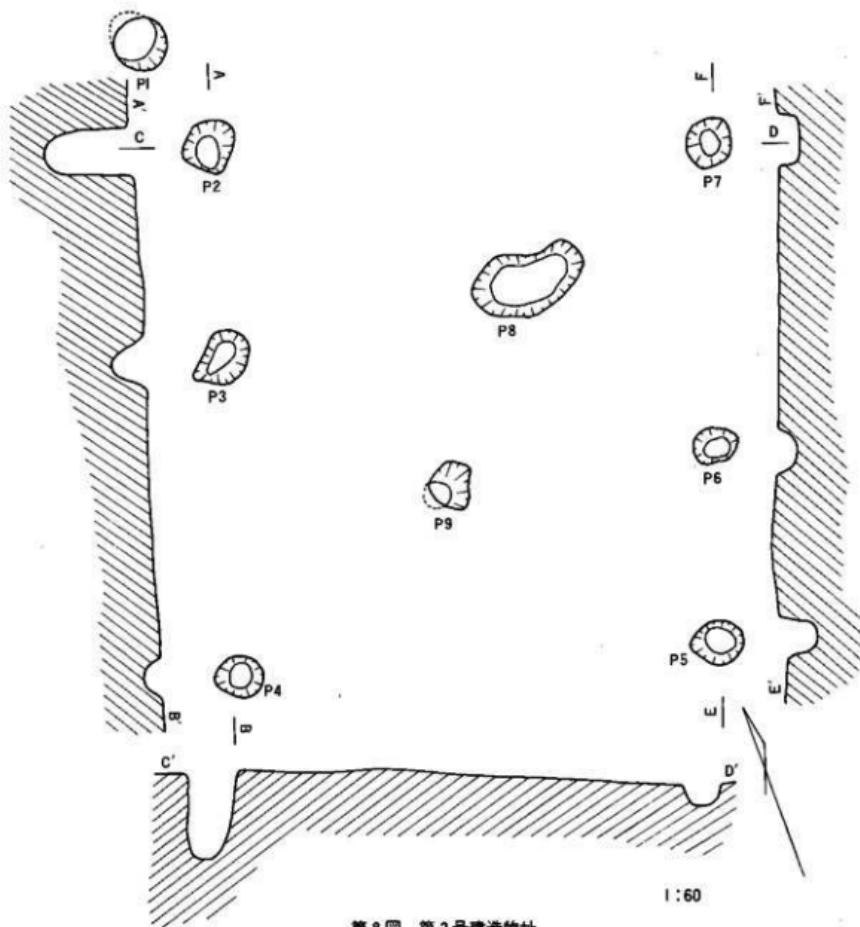
第7図 第1号建造物址

の柱穴址と考えられるのではないか。遺構調査時は遺物が全く検出されなかった。しかし表面採集では一帯から灰釉陶器片が多く、この時期の遺構であろうと推測する。遺構面の標高821.64mで遺構の長軸が真北より10°東に振れている。

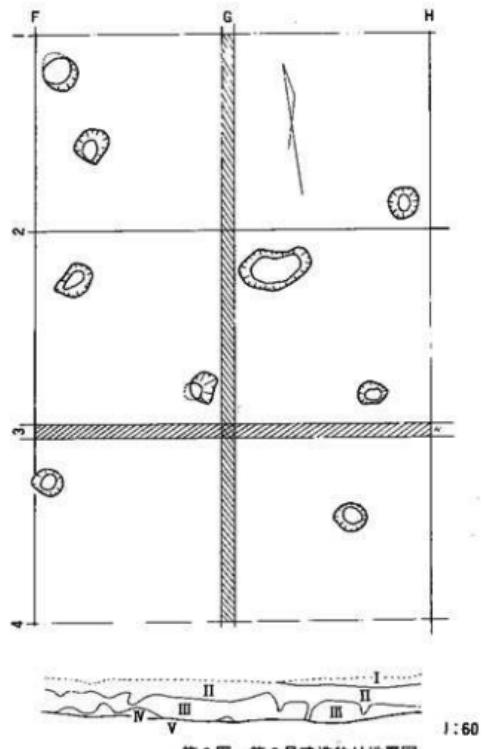
(2) 第2号建造物址（第9図）

本遺構はA調査地区G₂、G₃グリットを中心に発見された。第一号建造物址より9m東寄りである。遺構は一例が3柱穴よりなる二列で構成されている。プランは南北が3m=40cm、東西が3m=では正方形に近い。柱穴の大きさは直径30cm前後に一定している。深さはP₂だけが54cmときわめて深く他は12cmから24cmの間である。他にも3ヶ所のピットがあり、P₁は55cmと深く、それも

傾斜した穴で建造物のつかかい棒ではないかと考えられる。P₆、P₇は床面を下から補強した側柱でも立てたのであろうか。これも第一号の建造物と同じ時代の遺構と思う。そして使用した目的も倉庫的な地上建造物であろう。遺構面の標高は821.14mで、第一号址より50cm低くなっている。南北の長軸線は真北より21度東に振れている。



第8図 第2号建造物址



第9図 第2号建造物址地層図

層序説明（第2号建造物址）

第I層 〔耕作土〕水田を作った時の甌土で、いろいろな土が混入している。

第II層 〔黒褐色土〕粒子が小さく、石などほとんど混入していない。

第III層 〔茶褐色土〕茶色の強い褐色土である。

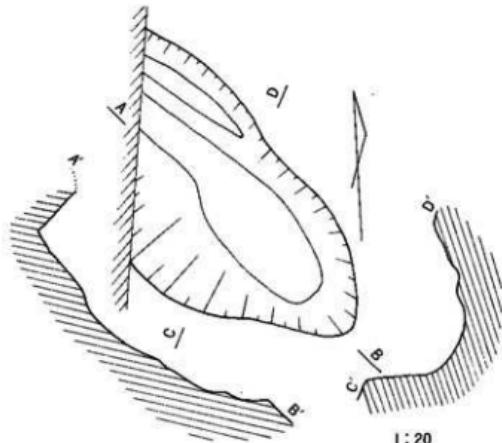
第IV層 〔黄褐色土〕ロームに近い黄褐色土である。

第V層 〔ローム〕ローム層

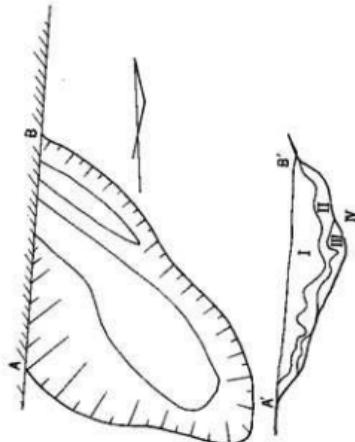
2. 土 拡

(1) 第一号土拡 (第10図)

A_3 グリットに発見されたこの遺構は、西側に張り出しているので80cm拡張した。それでもなお完掘はできず全遺構の状態を調査するまでには至らなかった。遺構は図に見るよう舟底型になつており、中の土層は三段になっている。出土物は全くない為時代決定は困難である。形から埋葬に使った土拡という推定もできる。



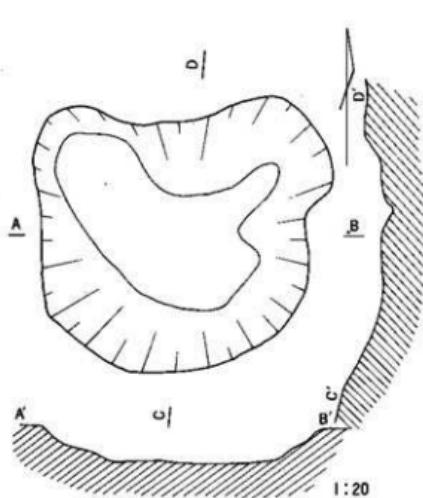
第10図 第1号土拡実測図



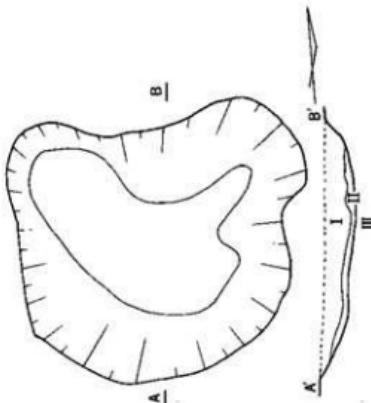
第11図 第1号土拵地層図

層序説明（第1号土拵）

- 第Ⅰ層 (耕作土) 黒褐色土で小石が混入している。
- 第Ⅱ層 (黒褐色土) Ⅰ層によく似ており粒子が細かい。
- 第Ⅲ層 (茶褐色土) 黒土が「ブロック状」に混入している。
- 第Ⅳ層 (ローム) Ⅲ層とⅣ層ははっきり分けられる。
- Ⅴ層上面は少し叩きになっているため。



第12図 第2号土拵実測図



第13図 第2号土拵地層図

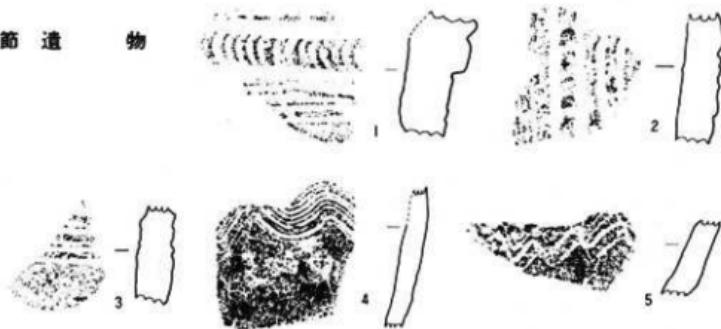
層序説明（第二号土拵）

- 第Ⅰ層 (黒土)
- 第Ⅱ層 (褐色土) ローム、黒土が混入している。
- 第Ⅲ層 (ローム)

(2) 第二号土拵 (第12図)

A₇ および A₈ グリットにかけて発見された土拵である。図に見ると不整円形を呈し、深さは 28cm とそれ程深くない。土拵内部も一号土拵ほど堅くしてなく、伴出遺物もないため使用目的も推測し難い。

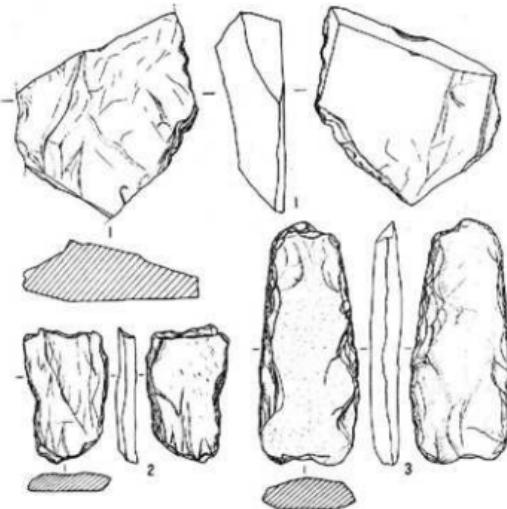
第3節 遺 器 物



第14図 土 器 拓 影

1. 土 器 (第14図)

出土した土器片は少量であるが、大別すると、縄文時代中期初頭の時期、弥生時代後半の時期、平安時代の土器の三つに分けられる。第14図1・2・3は縄文時代中期初頭の土器片で、この時期の特徴である半裁竹管を多く使用して文様を付けている。胎土中に石英と雲母を多く含み、焼成は良好である。4・5は弥生時代後半のもので二つ共に頸部から肩にかけての部分であり、波状文が施されている。胎土は精製した良質なものである。他に須恵器が1片出土している。又、調査地区集辺からは灰釉陶器の环口縁部が採集されている。



第15図 石 器 実 測 図

2. 石 器 (第15図)

石器の出土は3点である。第15図(1)はA調査地区F₂グリットの第III層よりの出土である。母石の芯を利用して作っている。上部の半分と刃部の一部が欠損している。砂岩質の大型の打製石斧である。(2)はB調査地区K₁₈グリットからの出土で小型で粘板岩の石斧である。上部半分が欠損している。(3)はB調査地区M₁₈グリットの出土で、母石の外側を利用して作った打製石斧である。両側刃に細かな調整を行ない形を整えている。周辺遺跡から出土する石斧はこの形態のものが最も多い。石質は砂岩である。

第Ⅳ章 ま と め

中曾根北遺跡は箕輪町西部の山麓附近に立地する遺跡の一つで、過去において縄文時代の石器や平安時代の遺物が採集されている。一帯は大泉川と帶無川による扇状地形が形成されており、遺跡は扇尖部やや上位に位置している。ここは県営畑地帯総合土地改良事業により埋蔵文化財包地が破壊されるため、それに先立ち緊急発掘調査を行ない記録保存を行なったのである。調査の過程や歴史的環境等において把握した所見と問題点を記してまとめとしたい。

1. 本遺跡の遺構と規模

土地改良事業の関係上、本遺跡の任意の地点を選定して発掘したため、必ずしも遺跡の中心部を調査したかは疑問であるが、調査面積は約800m²であり、その内に建造物址2棟、土括2ヶ所、他に柱穴状のピットが何ヶ所か見られた。検出された建造物址のうち一つはアランが3m×70cm×1m=85cmで、これは現在の2間×1間の大きさである。当時における建物の長さの単位等において研究しなければならない問題である。発見された土括のうち、一つは土括幕のように考えられるが、完掘できなかったので全体のプランを検討できず残念であった。建造物址は地上倉庫的建物と予想するが、そうした場合、この建造物を使用していた人々の住居址が附近にあると思われる。調査もそれを予想し、期待して進めたが、住居址の確認にまでは至らなかった。しかし遺跡一帯からは、須恵、灰釉等の遺物が散見できるところから、住居址が附近に存在することは十分考えられる。

2. 生活基盤

次に本遺跡の自然環境と生活基盤についてであるが、扇尖部やや上位に位置する遺跡一帯は、東に向ってゆるやかな傾斜面である。大泉川と帶無川のほぼ中央に位置し、川まで1kmと遠いのでこの両河川の利用は考えられない。遺跡の上方に富田部落があり、そこから桜木川という小河川が流下して本遺跡のすぐ南を通過している。この川の水を利用したものと考える。現在においても一帯は水の少ない地域で、水の確保には苦労している。そのため生活基盤を水田に求めることは考えられず、畠作とか、山林に依存した生活と考えるのが妥当であろう。

3. 歴史的環境

本遺跡の周辺には多数の埋蔵文化財包地が存在している。当遺跡に最も近い富田大久保遺跡と一の宮遺跡は西部山麓地帯を代表するものである。大久保遺跡においては町内でも数少ない旧石器時代末のポイントを出土しており、山麓一帯の歴史を一万年の昔にまで下げる所以である。縄文時代、平安時代においても多くの遺物を出土し、今後に多くの問題を投げかけている。一の宮遺跡も同様複数の時代を経た遺跡で、規模は西部山麓地帯では最大である。遺物出土量も非常に多く比較的保存状況の良い遺跡で、このまま後世に伝えたいものである。又、この山麓は延喜の古道と呼ばれる東山道の道すじという説もあり、一帯の平安時代の遺跡や古墳などと合せて考えなければならない。

中曾根北遺跡は発掘範囲で見る限り平安時代に形成された集落の片鱗が姿を現したものと見ることができる。その時期は僅かに伴った灰陶陶器の破片からみて十世紀前後の頃と思われる。この時期には上伊那の地に突如として大集落が形成される現象が見られる。前述の一の宮遺跡、中道遺跡、北城遺跡などはこの例である。それと同時に灰陶陶器を使用して生活した人々が、天竜川の河岸段丘上から次第に木曽、赤石山脈の山麓や渓谷に進出していく気配を濃厚に漂せている。この情勢は平安時代の上伊那の歴史的な興隆を窺わせるに十分であり今後具体的に解明しなければならない大きな課題である。当遺跡はこのような解明に良い資料として十分役立つであろう。

(柴 登巳夫・林 茂樹)

図 版



遺跡近景



A 地区全景



第 1 号建造物址



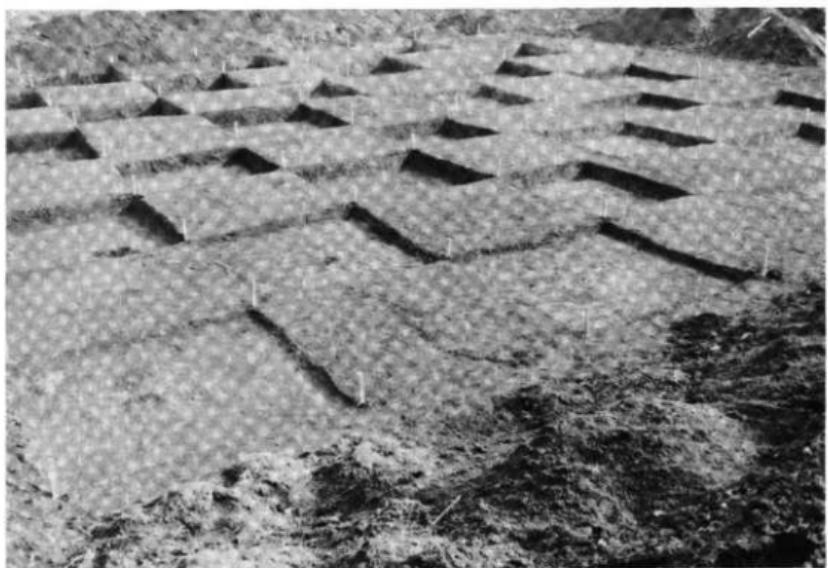
第 2 号建造物址



第 1 号 土 拙



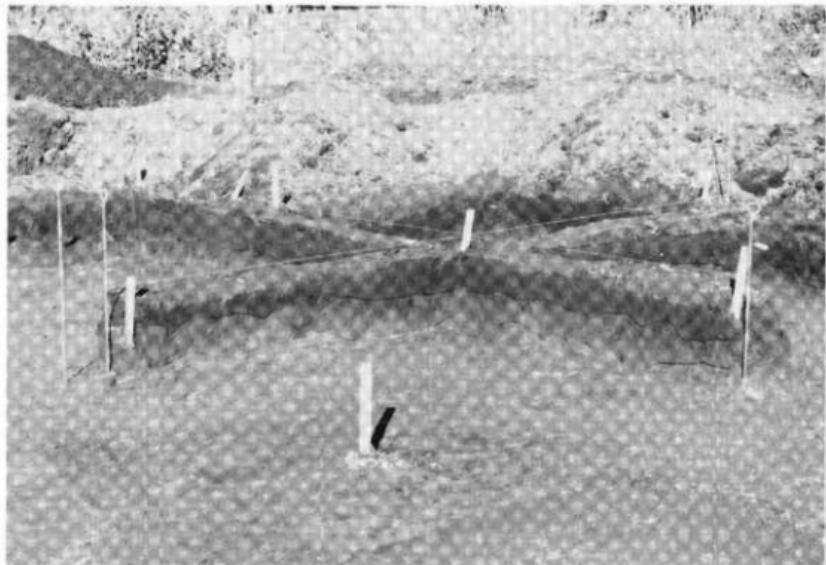
第 2 号 土 拙



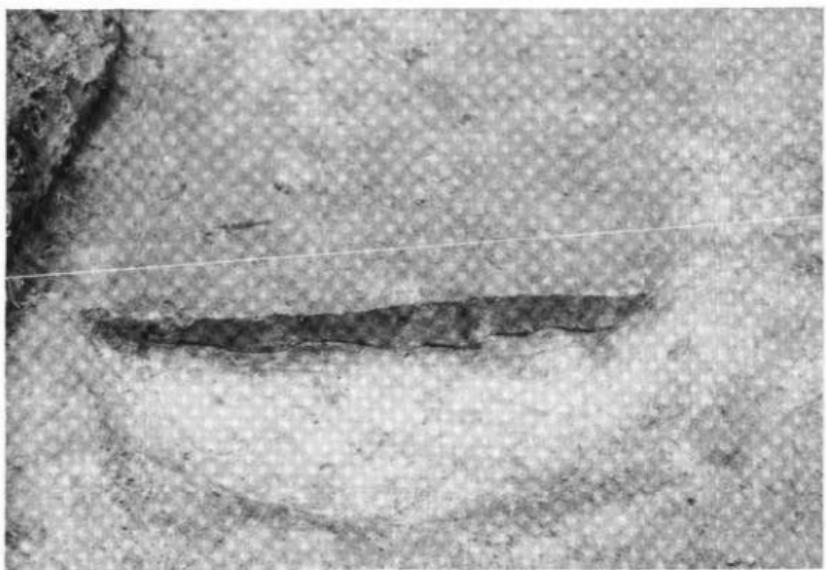
グリット発掘状況



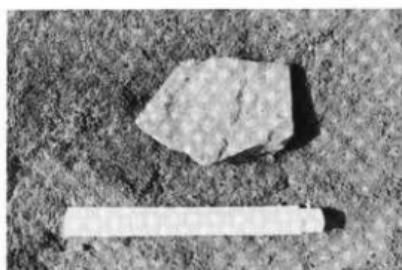
B 地区グリット発掘状況



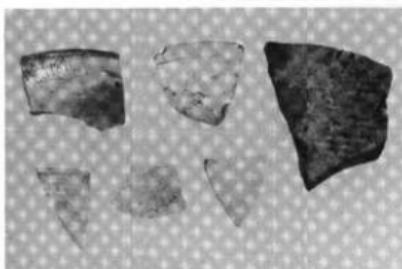
地層狀況



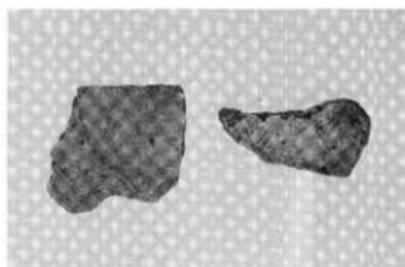
第2号土砾地層狀況



遺物出土狀況



出土遺物



調查風景



中曾根北遺跡A地区

~~緊急発掘調査報告書~~

昭和55年3月31日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 小松総合印刷機